

「この身になりますように」

ルカの福音書 1 章 35-38 節。

「御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。

見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。

神にとって不可能なことは何もありません。」

マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。」

クリスマスは、イエス様の誕生を喜ぶときです。私たちの罪を赦すため、私たちにいのちを与えるため、この暗闇の世の中に希望の光を与えるため、イエス様がお生まれになりました。

しかし、このクリスマスは 2000 年前に突然起こり、その瞬間だけの出来事ではありません。旧約聖書の時代から、神様のご計画があり、そして今に至るまで、神様の救いのご計画が続いているのです。

旧約聖書の時代から、クリスマスの準備が始まり、そして今もクリスマスが続いているからこそ、私たちは毎年、毎年、クリスマスのお祝いをするのです。

先日、喜楽希楽サービスのある職員の方と、「毎日クリスマス」という名前のデイサービスがあるということが話題になりました。

毎日ではなくとも、毎年、毎年のクリスマスを過ごしながら、今もクリスマスが続いているんだということに心を向けたいと思います。

クリスマスは、突然、天から赤ちゃんが降ってきた出来事ではなく、マリアという一人の乙女を通して、救い主がお生まれになった出来事であり、そして、マリアだけでなく、旧約聖書の時代から、たくさんの人たちが関わった出来事でもあります。

クリスマスは、神様の壮大なご計画があっただけでなく、多くの人たちがその計画に関わって実現した、驚くべき出来事なのです。

このクリスマスの出来事が今も続いています。イエス様が生まれたことを喜ぶだけでなく、今、私たちを通して神様はどのように働かれるのかを考えるクリスマスとしたいと思います。

最近、3年ぶりという言葉をよく聞くのではないのでしょうか。11月の花火大会も3年ぶり、教会でも3年ぶりの行事がありました。

喜楽希楽会も3年ぶりに再開をして、共に集まって、共に出かけ、共に食べて、共に話をして、共に笑ったりをすることの楽しみや喜びを思い出しました。

そして何よりも、人と人との関係を通して、神様の豊かな恵みを体験するときとなりました。

集まるにしても、送迎をする人がいて、助け合って集まります。食べるにしても、食事の量が多ければ、誰かが代わって食べることになります。

移動するにしても、車椅子を押す人がいれば、手を引いて一緒に歩く人もいます。

そのような人と人の交わりの中に、生きておられる神様の愛や温もりを感じるのです。

聖書の言葉を聞くこと、礼拝をすること、もちろん大切です。

しかし、それだけでなく、共に集まり、共に関係を持つ中で、私たちは人を通して働かれる神様の御業を体験することになります。

3年間のコロナ禍で私たちが忘れかけている大事なことなのではないでしょうか。

クリスマスも、神様と人との関係性、そして人と人との関係性の中で起こった出来事でした。そして、今も、神様と私、そして私たちの関係性の中でクリスマスの出来事が起こるのです。

クリスマスの出来事は、神様と人との関係性の中で、そして人と人との関係性の中で起こることである。

それは、クリスマスが実際に起こるよりもはるか前の創世記の時代からの約束です。

1. アブラハムの信仰

1-1. 恐れるな

創世記 12 章 1, 3 節。

「主はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」

「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

神様と人との関係性の中で、そして、人を通して人々に祝福がもたらされる。クリスマスの準備が創世記からすでにはじまっていました。

75 歳のアブラハムの信仰を通して神様が働かれました。アブラハムは信仰によって神様のご計画の中を歩むことになり、祝福の基となっていきます。

しかも、神様のご計画というのは、人間的な感覚ですべて上手く行くというようなものではなく、人間には想像できないような不思議な導きであり、予想ができないものであり、人間の願った通りに事が進むということではないようです。

アブラハムは、そのような神様の不思議な導きに身をまかせ、人生をささげることになりました。そして、人生をささげたとしても、アブラハムの時代に完成することのない壮大な神様のご計画の、はじまりのはじまりだけを担うことになりました。アブラハムの人生こそが、神様の救いの計画の中を生きる、信仰者の歩みです。今年の高齢者顕彰礼拝においても、私たちが模範とすべき信仰者の歩みとして、ご紹介いたしました。

主なる神様に導かれて、カナンの地に祭壇を築き、礼拝しつつ、なお、アブラハムは様々な苦労を経験します。

祝福があるはずの地で、飢饉を経験します。神様に導かれた人生を送っているにもかかわらず、貧しさを経験し、争いを経験します。

創世記 15 章 1 節。

「これらの出来事後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

75 歳のアブラハムが神様の声を聞いて、旅を始めてから、色々な出来事がありました。これからの人生どうなっていくんだろうかという恐れが募ってきます。そんなアブラハムに主なる神様は「恐れるな」と言われました。

「あの祝福の約束を忘れてしまっているのではないだろうか。」アブラハムには不安が募りますが、神様は確かにアブラハムと共におられました。アブラハムが、疑問、不安、恐れ、無力感、孤独、色々な思いを抱えていることを知っておられたのです。そんなアブラハムに神様は呼びかけられました。「恐れるな」、「大丈夫だ」、「安心なさい」。

このときの、「恐れるな」という言葉は、聖書に出てくる最初の「恐れるな」という言葉です。信仰の父アブラハムの人生には恐れが伴いました。そして、イエスの母マリアにも同じようにして、「恐れるな」という言葉がかけられることになるのです。

神様の救いの計画、クリスマスの計画は、驚くべきことであり、恐れてしまうほどの人間の考えやわざを超えた、神様の大きな計画なのです。そして、今、私たちも、驚くような、恐れてしまうような、神様の救いの計画の中にひとりの信仰者として生かされているということに心を留めたいと思うのです。

1-2. さあ天を見上げて

創世記 15 章 5 節。

「そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えらるるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」」

アブラハムにとって、一番の問題は子どもがいなかったということです。75 歳を超えて、「あなたの子孫を通して祝福が広がる」と言われて、子どもがいなかったということはアブラハムを不安にさせました。

それだけでなく、カナンに導かれて 10 年間、様々な現実的な問題に悩まされ続けてきました。神様の祝福の計画が本当に実現するのだろうか。

神様の壮大なご計画の中で、人間的な考えと、信仰的な考えの間で葛藤するアブラハムの姿がありました。

アブラハムは主なる神様に向かって正直に「どのようにして、あなたの計画が実現するのですか」と、「それでは、私はどうしたら良いのですか」と問いかけるのです。

「子どもがいなくても、それでは養子を迎えるということなのか。奴隷の息子を跡取りにするということなのだろうか。」

アブラハムは、自分なりに考えた計画を、神様に打ち明けます。

しかし主なる神様は言いました。「ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」

人間ができなくても、神様ができることがあります。

アブラハムに人生に神様が働かれることで、実現することがあります。

マリアの人生に神様が働かれることで、実現することがあります。

そして、私の人生に神様が働かれることで、実現することがあるのです。

「さあ、天を見上げなさい。」

この天の星々を造ったのは誰だか知っているのか。あなたは、天の星々を造ることができるのか。

この私が天の星々を造ったのだ。あなたができないことでもあっても、わたしはできるのだ。

主なる神様は、私たちが神様の大きな計画を理解できず、想像することができず、現実的な問題に心奪われて、悩まされて、不安にあり、心配になり、恐れるときに、私たちが抱えているその全てを受け入れて、理解して下さり、「さあ、天を見上げて」と言われるお方です。

人間的に考えるならば、「そんなことはありえない」ということになるかもしれません。

しかし、天を造られた神様が、この世に光を与えられた神様がなさろうとしてのご計画であるならば、それは必ず実現します。

1-3. アブラムは主を信じた

創世記 15 章 6 節。

「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」

「アブラムは主を信じた。」実際にアブラハムは自分の子を見ていないけれども信じました。人間的に考えるならば、高齢の夫婦に子どもが与えられると言うことはあり得ないことでありましたが、アブラハムは信じました。

アブラハムは主を信じました。天地を造られた神様を信じたのです。人間的に考えるならば不可能なことであっても、神様ならできると信じたのです。

ただ主を信じること、ただ主に期待すること、主の約束の実現を待ち続けること、これが信仰の父アブラハムの信仰です。

アブラハムの子どもたちは、確かに神様の祝福を受けて増え広がっていきました。

聖書のはじめ、創世記のときから、クリスマスの準備が始まっていたのです。

クリスマスの準備、神様のご計画は、アブラハム、イサク、ヤコブと引き継がれ、その次の世代、また次の世代と、神様の計画の中を生きる信仰者たちを通して、引き継がれ続けてきたのです。

2. マリアの信仰

2-1. 主のあわれみの中で

アブラハムに祝福の約束をされた神様が、その祝福の実現ために救い主を送られたのがクリスマスの出来事です。

高齢のアブラハムを通して働かれた神様が、時代を超えて、婚約中の若いマリアを通して働かれました。

神様はあえて、ご自身の力を表すために、高齢のアブラハムや乙女マリアを選んでいるようです。そして同じようにして、罪深く、弱くて、足りない私たちを選んで、今も続けて神様のご計画を進めていくのです。

ルカの福音書 1 章 28 節。

「御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」」

神様がマリアを選んだのは恵みによるのです。アブラハムを選んだのも、一方的な選びであり、恵みでした。神様は恵みによって私たちを選んでくださるお方です。そして、アブラハムを選び、マリアを選び、私たちを選ばれる神様は、「主があなたとともにおられます」と約束される通り、いつも主が共にいてくださり、導いてくださるのです。

神様は、マリアを恵みによって選び、そして、いつも共にいるということを約束してください。

しかし、マリアは突然のことで驚き、戸惑います。「どうして?」、「これから何が起こるのだろうか?」

高齢であったアブラハムと同じように、不安や恐れが出てくるのです。

私たちは、自分の考えや、人間的に理解や想像できる状況の中では安心して、落ち着いて生活することができるのですが、ひとたび、神様が私たちの人生に働きかけられると、神様の計画を理解できず、不安や恐れに包まれてしまうのです。

アブラハムに「恐れるな」と言われた神様は、御使いを通してマリアに言われます。

ルカの福音書 1 章 30-31 節。

「すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」

見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」

戸惑うマリアに対して、「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」と告げられます。

このときマリアは、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と言われて、何か宝くじに当たったように、自分だけ何か利益を受けるような、自分の人生が特別に恵まれた人生になるということを考えたわけではありません。

マリアは、今、自分の身に起ころうとしていることは、神様があのアブラハムに約束された、あの祝福の約束の実現のために、今、これから私が用いられようとしているのだということに気がつくのです。

この私を通して、神様が働かれようとしている、この私を通して、神の救いと神様の祝福が人々のもたらされようとしている。そのことに気づかされて、さらに驚き、戸惑うのです。

そこにはマリアの信仰があり、マリアの神様の計画に対する期待がありました。それは、その後、マリアが神様のご計画を思い巡らし、神様のみわざをほめたたえ、賛美する、マリアの賛歌を通して明らかにされます。

そのマリアの賛歌の中で、マリアはこのように賛美をします。

ルカ 1 章 54-55 節

「主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

神様が私たちに与えてくださるものは、あわれみであり、恵みです。クリスマスに私たちに与えられたものは、イエス・キリストによる救いであり、それはあわれみと恵みによるのです。

神様のご計画の中で、私たちは、恐れや戸惑いを覚えることがあります。しかし、神様は私たちに困らせようとか、意味もなく苦しみを与えようとかされることはありません。確かに、アブラハムもマリアも大変なことを経験しました。そのような中で、これから、神様に導かれていこうとしているマリアが賛美したのは、あわれみを忘れずに、助け、導かれる神様でした。

アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れることのない神様が、マリアに働かれ、そして私たちにも働かれるのです。神様のあわれみによる、助けと救いの御業は、アブラハムやマリア個人の救いにとどまらず、時代を超えて、世界に広がっていくものです。アブラハムを通して、イスラエルの民に広がり、さらにマリアを通して、そして教会を通して、私たちを通して、イエス様の救いが世界に広がっていくこととなります。

2-2. 神の力によって

あわれみ深い神様を賛美しつつ、これまでの歴史を通して確かに働いてこられた神様をほめたたえつつ、同時に、現実的な問題で悩んでしまうのが私たちです。高齢のアブラハムが、どのようにして、子孫が増えるのだろうかと神様に問うたように、「あなたは身ごもって、男の子を産む」と言われたマリアもまた、御使いに言います。

ルカの福音書 1 章 34 節。

「マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

マリアは信仰を持ちつつ、神様の計画を聞いて、「私はどうしたら良いのだろうか、どのようにしてその計画が実現するのだろうか」と問うのです。

すると、御使いを通して、神様の答えがありました。

ルカの福音書 1 章 35 節

「御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

聖霊の力によって、神の力によって、ことが起こるのだと言うのです。

アブラハムに対して、「さあ、天を見上げなさい。」と語り、このわたしが天の星々を造ったのだから、あなたにはできないことがあっても、わたしはできるのだと教えたのと同じように、神の力によって、救い主が生まれるとマリアは教えられたのです。

ですから、クリスマスの出来事を思い巡らす私たちも、アブラハムやマリアと同じようにして、人のうちに働かれる聖霊と神様の力にゆだねることを覚えたいと思います。

人に出来ないことであっても、神にはできるのだ。

御使いも続けてマリアに言いました。

ルカの福音書 1 章 37 節

「神にとって不可能なことは何也不会あります。」

マリアはこの約束に信頼しました。

アブラハムを召し、マリアを召された神様は、私たちを召し出されるお方です。私たちも同じようにして、「神にとって不可能なことは何也不会あります。」という約束に信頼したいと思います。

マリアはこの約束に信頼して、これから神様のご計画の中で、神様の導きの中で歩み続ける決心をしました。

マリアは、旧約時代から続く神様の、あわれみ深い導きに思いを巡らしつつ、これから大事な役割を担うことになる、自分自身のこれからのことを色々と考えたのではないかと思います。

「聖霊によってみごもる」ということももちろんそうですし、これから、生まれてからイエスと名付けた息子を育てていかなければならないこと、婚約者のヨセフとの関係は上手くいくだろうか、将来が全く見えない中で、おそらく大変なこともたくさんあるだろうと、どうしても不安や心配になってしまうこともあったのではないかと思います。

それでもマリアは、あわれみ深い神様に信頼して、ゆだねることを決心しました。

2-3. この身になりますように

ルカの福音書1章38節。

「マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。」

マリアは、「私は主のはしためです」と「主の奴隷です」と、神様のなさろうとすることのために、自分をういてくださいと、たとえ、困難なことがあったとしても、「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と、神様にゆだねたのです。

そのようなマリアの信仰があってこそ、2000年前のクリスマスの出来事がありました。そして、さらにはアブラハムの信仰があったからこそ、クリスマスの準備が始まっていたと言うこともできます。

クリスマスの出来事は、神様の大きなご計画の中で起こった出来事であり、創世記から始まって、神様のあわれみ深い働きと、そして大勢の信仰者達の、信仰の歩みを通して、実現することになった出来事です。

この神様の大きなご計画はイエス様の誕生で終わりません。クリスマスはまだ終わっていないのです。毎年、毎年、これからもクリスマスは続いていきます。

私たちがまた、神様のご計画の中を生かされています。私たちの信仰の歩みのうちに、聖霊が働き、神様の力が働き、イエス様の救いが広がっていきます。

クリスマスの出来事を思い起こしつつ、そして今も神様が働かれていることを覚えながら、この身に起こることは何だろうか、神の力によって私はどのようにして用いられるのだろうかと思い巡らしつつ、「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」

この身を通して、主なる神様の祝福と、救いがこれからもまた広がり続けるようにと、祈りつつ、クリスマスの時を過ごしたいと思います。